

C 65

オーストラリア在住日本人女性の食生活について
愛知学泉大学・家政 ○堀江和代 渡辺竹香
名古屋市立女子短大 堀江祥允

目的 近年、海外で生活する日本人が増えてきている。一方、世界の長寿国となり、日本人の食生活が国際的に注目されている。そこで海外で生活する日本人女性の食生活を調べ日本人の栄養改善の一助や、日本食普及の参考とするために、在豪日本人の食生活について調査してきた。彼らの意識調査結果と栄養摂取状況は、日本家政学会中部支部第35回総会(1989)で報告したので、今回は食品摂取状況について報告する。

方法 被検者はオーストラリア、ビクトリア州のメルボルンならびにその近郊に在住する日本人女性で、生後から成年期までを日本で生活し、異国籍人と結婚した者10名、年齢は30才代3名、40才代4名、50才代3名、夫の出生時の国籍はオーストラリア8名、イギリス1名、ポーランド1名、結婚歴は6~28年、オーストラリア在住年数は4~28年、有職者7名であった。調査期日は1986年9月、方法はアンケート方式と面接方式の併用、調査期間は1週間である。なお、(ほぼ同年令の幅の)名古屋市在住の女性を比較の対象とした。

結果 一日当たり使用食品品目数は名古屋市在住女性(以下対象)が28.5品目であったのに対して、オーストラリア在住女性(以下被検者)のそれは21.1品目と少なく、その差は6食品群で見ると、1群、2群、4群に顕著であり、食品群別摂取量の結果と同じ傾向であった。食品の使用頻度は対象が1.3に対して被検者は1.2で両者間に有意差は無かった。主食は対象の米飯67%、パン23%に対して被検者は米飯31%、パン34%で米飯に大きな差が認められた。一食当たりの使用食品数は、主食がパンの場合には両者とも5.4と差が無かったが、米飯の場合には対象が11.9品目であったのに対して被検者は8.0品目と少なかった。